

最優秀賞受賞研究 インスタレーション部門 新しい SA先を探そう : 新興国SA

著者	池田 隼人, 久保谷 雄真, 斉藤 拓, 高橋 裕大, 本多 翔悟, 梅野 紗衣, 大西 優輝, 小林 稜, 笹本 康貴, 鈴木 智香, 中川 卓彌
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化
巻	15
ページ	171-173
発行年	2014-04
URL	http://hdl.handle.net/10114/9354

新しい SA 先を探そう—新興国 SA —

国際文化学部 興石ゼミ

池田隼人・久保谷雄真・斉藤拓・高橋裕大・本多翔悟・梅野紗衣・
大西優輝・小林稜・笹本康貴・鈴木智香・中川卓彌

我々興石ゼミは、国際文化学部の SA に対して、費用が高額（長期 SA9 大学の平均費用：約 124 万円）、生徒の SA に対する目的意識がバラバラ、自分自身で授業カリキュラムを組む／選択することが出来ない、SA が観光と同等化している、などの問題点を挙げ、そこから 2 つの問題意識を持った。

1 つは、SA 先が大国に偏りすぎているという点である。行き先の多くは先進国であり、SA の根本的意義は異文化体験であるにも関わらず、日本とさほど生活環境に変わりのない暮らしを満喫することが出来る。それゆえに、観光気分で SA に参加しほとんど何も得ずに帰ってくる学生が少なくないという事態を招いているのではないだろうかと考える。

もう 1 つは、多くの SA 先において語学偏重のプログラムが組まれているという点である。これでは言語「を」学ぶだけで終わってしまい、言語「で」何かを学ぶところには行き着かない。語学はツールであり、それを学ぶだけでは異文化理解はままならないのではないだろうか。やはり海外に行って半年近くそこに住むならば、その地でしか学べないことを何かしら得て帰るべきではないか。

そこで、我々はこの SA に新しい価値を付け加えるべく、2 本の柱を用意した。それは、「新興国」と「語学 + α 」である。そして、この 2 つを達成するために、フィリピンとインドの 2 か国を提案するこ

ととした。この2つの国をSA先にすれば、日本における暮らしとは大きくかけ離れた「非日常的」な世界に身を置くことが出来、そこで真の異文化体験を行うことが出来る。また、費用も安く済む（いずれのSA先も約4か月の滞在で100万円以内に収まる）ため、SA参加に対する経済的な負担を軽減することも出来るのである。

フィリピンの「語学+ a」はインターンシップとそれを支えるマンツーマン語学指導である。上質なマンツーマンとグループレッスンによる英語指導を組み合わせることで、より短期間でレベルの高いコミュニケーション能力を培うことが出来、またそれを用いてビジネスの世界に飛び込むことで、新興国の成長を肌で感じながらその地で働く経験を積むことが出来る。また、インドのそれはITであり、昨今成長著しい「東のシリコンバレー」と呼ばれる地で、英語を用いて先を行くインドのITを学べる可能性を有する。国際文化学部が力を入れている情報分野と、コミュニケーション能力に優れた国際社会人を育て上げるのに相応しいプログラムである。いずれのSAにおいても、費用は安く、かつこれまでのSAにはない新しい体験をすることが可能になる。

この2か国の新興国SAについて、2グループに分かれてプレゼンテーションにより提案を行い、その後両チームによるディスカッションが行われた。ディスカッション終了後、オーディエンスによりプレゼンテーション及びディスカッションの双方を通じてどちらのSA先により興味が沸いたかをジャッジしてもらうことで、勝敗を決した。また、当日配布したレジュメはSAパンフレットを模したものとし、新しいSA先をより現実的に訴求しようと試みた。視覚・聴覚の両側から新しい提案を行った我々の発表には、当日多くの先生方にお越しいただき好評を博した。

この発表を通して、我々興石ゼミは学部そして先生方に対し今後の国際文化学部SAの形を考えていく上での何らかの提案をすることが

出来たのではないかと考えている。まだまだ国際文化学部は設立からそう長い時を経ていない新しい学部である。現状を完成形と考えず、今後も試行錯誤を重ねていく中で学生がより充実した経験を重ねることが出来る環境が整っていくことを、我々興石ゼミ一同は切に願っている。また、興石ゼミはこれからもそのための1つの提案が出来るよう、常に問題意識を持ち続けていきたいと考える。